

留学体験記

～若き宗教学者のみた韓国～

古田 富建

06年2月末、「寒い」を通り越し「痛い」という表現のほうが的確な、極寒の韓国に到着。生まれて2度目の韓国長期滞在となる。韓流記者を務める妻の転勤に合わせて、大韓民国政府奨学金を申請したところ運良く合格。妻の仕事にくっついての渡韓となった。筆者、中学高校の思春期をソウルで過ごした帰国子女だ。一昔前までは、ソウルは第二の故郷、もしくは地元感覚があったが、今となっては日本での生活のほうが長くなり、故郷ソウルもはるか昔の話。大学院に入ってから資料収集などのために1年に一度は来韓してきたし日常会話には事欠かないが、さすがに長期滞在となると心細い。家探しから家具や電気機器の購入などイチから全部整えるのには思いのほか手間がかかったが、何とか高校時代の友人の手を借りつつ一通り整えることができた。生活レベルとなると、意外と韓国事情を知らなかったと痛感。

大韓民国政府奨学生として1年間研究生扱いで滞在し、1学期は韓国学中央研究院の宗教学科、2学期はソウル大学の宗教学科に在籍した。

韓国学中央研究院は、昨年までは韓国精神文化研究院といわれ、軍事独裁期に建てられた政府の御用機関であったが、今は国立の韓国学研究所である。ソウル郊外にあり周囲に

文化施設が皆無なロケーションは筑波大、機能面では日文研と似ている。韓国学中央研究院の宗教学科のカン・ドング教授は、現在韓国宗教学会の会長である。外見は小柄だが大酒飲みで、性格は短気で頑固、やんちゃなガキ大将タイプである。お弟子さんたちはそんな先生に振り回され苦勞していたが、何ともいえないカリスマのある人物だった。入学早々、「今度の市民マラソン大会に全員で出場する。もちろん古田君も出なさい。フルマラソンは無理でも20キロは走りなさい」。動揺して一瞬頭が真っ白になった。何とか頼み込んで5キロにエントリーさせてもらい、その日からジムで体作りを始めた。毎年参加しているそうだが、教授はフルマラソンを完走、お弟子さんたちも1名抜かせば皆完走。そんな光景を見ながら、この人たちは一体何をしているんだろう…と思わず首をかしげた(笑)。授業は火曜日の午前中に行われた。ゼミ形式だったが、全員で文献を読むというものではなく、毎週ゼミ生1人1人に課題が与えられ、教授が指導をする時間である。「英文の文献を読んでまとめてこい」だの「王朝実録を数冊読んでこい」だの、分量的にも不可能に思える課題ばかりだ。それに対してゼミ生は、黙々と徹夜で読むという苦行に耐えていた。幸い筆者には、無茶な量の課題は出されなかった。断っておくが、先生の体

育会系気質，ミリタリー文化的な指導は，韓国の大学一般に見られるものではないようだ。

この教授と過ごす日々にはサプライズなことが多く，付いて行くのに苦労しつつも貴重な体験ができた。授業終了後には決まって，教授のおごりで外食。もちろん焼酎を酌み交わしながらだ。ある日は，昼食後に急に「今から木浦（モクポ）に行こう」と言い出し，着の身着のままで出発。ソウルから5時間かけて木浦にある珍島（チンド）という島まで行き，民泊で4時間ほど仮眠をとった後，夜中の3時に「次は釜山だ」…。さらにそこから4時間かけて釜山に移動し，そこで朝食をとってからソウルに戻った。わずか24時間で朝鮮半島の最西端と最南端につばをつけて帰ってくるという「武勇伝」に近いことをやってのけたのである。またある時は，ゼミ室に入るなり「今日は登山」と言い出し，足がすくんで動けないほどの急なげっぶちの山の斜面を上ったり…。日本から来た留学生に対する，カン教授なりに歓迎方法だったのだろう。しかしアクティブなこの教授だからこそ，「宗教は実際に見なければならぬ」と，さまざまな宗教施設に連れて行ってもくれた。ピリ辛だが味わいのあるカン教授との出会いは，留学生活の一番の思い出だ。

2学期はソウル大学に移籍した。本来研究生は所属機関を移動できない仕組みなのだが，「研究者間の人的交流」という理由にならない理由で奨学金支給機関に頼み込み，前例のない編入に成功した。

ソウル大はいわずと知れた韓国最高峰のエリート大学。植民地期には京城帝国大学と呼ばれ，今年で60周年になる。雰囲気は東大と似ていて，紳士的で優秀な教授陣と学生が黙々と研究に励んでいる。韓国学中央研究院の体育会系気質とは似ても似つかぬ雰囲気であ

る。現役ミスコリアと交際中だという格好いいK君を除けば，いろんな面で東大の宗教学研究室と似ている（笑）。「この人は服装や雰囲気やけに●●さんに似ている」と思うこともよくあった。韓国には兵役があるので，20代後半で修士に入学するケースが多い。そのため筆者と同世代の人間は，入学したてのM1が大半。ソウル大の授業にも，また違う意味で驚かされた。アサド先生の英語書籍1冊を来週までに要約して発表，などといった無茶な課題が，修士1年生にも平気で課される。日本ではふらふら遊んだり副業にばかり精を出していた筆者にとって，韓国の学生の勤勉さには大変驚かされた。これだけ勉強しているだけあって，最近の研究にはうならせる内容のものもちらほら出てきている。特に40代以下の若手研究者の方法論や研究手法などは，決してあなどれない。これまで見てきた論文は，著名な大学の教授のものでも内容が陳腐なことが多く，韓国宗教学を多少甘く見ている面もあったが，いい意味で裏切られた。民俗学の教授から「韓国の宗教学は欧米宗教学の我流。何をやろうとしているかまったく分からない」という非難を耳にしたことがある。確かに韓国の宗教学は研究者の数が少なく，独自の方法論はおろか，世界的に注目されている韓国のキリスト教などの本格的な研究もこれからだ。

また韓国の大学生は，日本の院生より語学力が上のような気がする。翻訳があまり進んでいないため，原書を読むのは当たり前で，リーディングだけなら日本語が分かる人も多い。図書館に行っても，開架コーナーに英語や日本語の書籍が，まるで読めない奴が悪いといわんばかりに並んでいる。日本語の得意な院生と読書会をしているが，宮田登先生の書籍を辞書無しで読めるほどだ。蛇足だが，韓国の大学図書館は大変面白い。日本の民俗

・風俗のコーナーに大川周明の『日本精神の研究』と酒井順子の『負け犬の遠吠え』が仲良く並んでいたり、宗教コーナーにいくと島菌先生の著作の近くに細木数子の占い本があったり。日本の大学図書館では考えられないような突っ込みどころ満載の配列に、1人ニヤニヤしてしまうことがある。

6月には韓国の宗教学会にデビューした。日常会話以外の学術的な韓国語にはあまり自信がなかったが、「学会で発表しろ」という教授の一言でデビューが決まった。韓国の宗教学はキリスト教神学の影響が強いためか、会員の数がかなり少ない。宗教学を学んでいても学会に参加しない人も多く、こじんまりとしていた。発表数は2日間で35本。

今回の留学の目標は、博士論文の資料収集、同世代の韓国人研究者との人脈作り、宗教を現場で体験するという3つ。韓国の宗教現象といえば、「世界的に有名なメガチャーチ」や「ファン・ウソク教授の生命倫理問題」「民俗宗教のムーダン」などが有名。それ以外にも『冬のソナタ』スピリチュアリティや「ワールドカップの道端応援（ナショナリズム、祭り文化）」「映画産業と同規模といわれる一大産業、占い」なども面白い。それらをできるだけ生で体験しようと、日曜は教会、釈迦誕生日はお寺、開天説は大倥教、ワールドカップ開催期間は市庁前、顕忠節（殉国者の冥福を祈る日）には国立墓地、暇な時は占い喫茶へと忙しく歩き回った。韓国の子どもがなりたがる職業ナンバー1が、「スポーツ選手」ではなく「教授」だという。学問に対する崇敬心の熱い国なのだ。筆者も名詞の肩書きだけは立派だったので、どこへ行っても大歓迎された。恐るべし学歴主義社会とも思ったが、フィールドワークをやるのには大変都合がよかったともいえる。ある祭りでは知

り合った男性シャーマン（パクス）の家に招かれ、彼の身の上話を3時間以上聞き、ご飯もご馳走になるなどということが簡単になってしまうのだ。

ここで少しだけ韓国宗教体験を紹介したい。

筆者の自宅は梨花女子大学近辺。そこには「四柱カフェ」という古い喫茶が30近く密集しているエリアだ。「四柱カフェ」とは90年代に登場し始め、最近は大きな町にはどこにいてもあるが、狎鷗亭や梨花大前などには特に密集している。「四柱カフェ」では、四柱とよばれる明理学とタロット占いが同時に行われることが多い。ムーダンによる占いは「神占」と呼ばれ、こちらには怖がって若者はあまり行かない。四柱は統計学、タロットはキリスト教（カトリック）的なコンテクストを含むため、クリスチャンの多い韓国では明理学とタロットが受け入れられやすいようだ。

学問的興味だけでなく、個人的にも占いは大好きである。文系博士課程に在籍している身としては、先行きの保証のない前途多難な未来の避難所として、うつになりかけるとすぐ占い屋に行く。近所の「四柱カフェ」のオーナーとも親しくなり、自由にフィールドワークをしてもいいという約束のもと、日本語通訳の無料ボランティアもしている。占いを第三者的な立場で見られるので、大変重宝している。

紙面の都合で宗教体験を書き切れないのが悔やまれる。とにかく1年でさまざまな体験ができたことは確かである。尻を叩かれながら論文も何本か書けたし、学会デビューもできた。そんなさまざまな体験の中で、一番ためになったと思えるのは同世代の研究者との語りだった。06年は「竹島問題」「8・15靖国参拝問題」など日韓両国の関係が非常に険

悪になった年でもあった。しかもその年の研究室旅行の行き先は、反日感情を植えつける残虐な蠟人形が飾られた「独立記念館」。一緒に回った院生と、それをつまみに「靖国神社問題」「天皇制・天皇制イデオロギー」「竹島問題」などを議論したりもした。韓国の知識人には、日本のテレビで見るような被害者妄想だけを訴える頭の固い人間は実はほとんどいない。靖国神社の話をしていて「アジアを無視した日本の政治家の言動はいただけないが、うちのおじいさんは死ぬ前に一度、戦友のいる靖国神社に参拝したいと言っている。戦争体験者にはそういう人間もいる」と筆者の話に神妙に聞いてくれたことが印象的だった。